

2017年5月16日

眩暈(めまい)について

めまいについて、まず現代医学的に分析して、鍼灸がどういっためまいに対して有効なのか、考えてみたい。

めまいは体のバランスを整える平衡機能が障害された時に起こる。

人がめまいをおぼえる時には、次のようにそれぞれ微妙に感じ方が違う。

1. 回転性のめまい・・・本人や周囲がグルグル回転する。
2. 非回転性のめまい・・・身体がグラグラ動揺するような感じ。
3. その他・・・気の遠くなるような感じ、ふらつき、不安定さ。

次に、めまいの原因について分類してみよう。

A. 末梢前庭性のめまい

激しい回転性のめまいが特徴で、前庭神経(前庭器官と脳の中枢を結ぶ神経)の障害による。

※前庭器官、(耳は外耳、中耳、内耳と分かれていて、一番奥の内耳には主に聴覚に関する『蝸牛：かぎゅう』と平衡感覚に関する『前庭・半規管』がある。後者を前庭器官という。

B. 中枢前庭性のめまい

中枢である小脳や脳幹の障害では、回転性のめまいは少ない。動きのぎこちなさ、ふらつき、不安定感を伴う。

血液の流れは、推骨・脳底動脈→前下小脳動脈→前庭器官や前庭神経を潤す。この流れの中で、血管に梗塞、出血、血栓などの障害が起こると、平衡感覚が正常な状態ではなくなる。

C. 非前庭性のめまい

内耳の前庭器官、前庭神経、脳幹、小脳などの部位以外の原因でおこるめまい。多くが頸の障害が原因で引き起こされる。

①頸の回転や過伸展により推骨動脈が圧迫され、小脳・脳幹・内耳への血流が不足し、めまいが起こる。推骨動脈そのものに障害(狭窄など)がある場合にも起こる。

②頸椎の変形や動脈硬化のより、脳循環を保つ血圧調節反射(頸動脈洞、頸動脈小体)が正しく作動しないため、気が遠くなるような、あるいは、血の気が引くようなめまいが起こる。

また、頸部に障害があると、頸の筋肉が緊張することによって、頸部交感神経節が圧迫され、自律神経の機能障害を起こす。

- ③頸の筋肉からの求心性インパルスが障害されてめまいを起こす。
頸筋からの正しい情報により、反射的に頭を地面に対し垂直に保つための姿勢調節をしているが、(前庭頸反射)正しく作動しないとめまいを起こす。
- ④頸以外に、視覚によるめまい、内科的な要因(急激な血圧変化等)によるめまい、大脳皮質の影響によるめまい(神経症、ヒステリー、統合失調症、うつなど)がある。

以上、めまいについての現代医学的な分析を試みたが、異常所見が最も見つけにくいのは、頸性のめまいである。頸の『筋肉のコリ』が主な原因となるので、画像診断では把握しにくいからだ。

鍼灸はこうした、現代医学で最も苦手とする分野で、臨床上多くの有効性を発揮している。鍼灸の診断は触診が中心であり、筋肉のコリは指先で把握できることも大きく影響しているものと考えられる。

鍼灸の治療には様々な方法があるが、私の場合は、最初から直接、頸の筋肉のコリだけをとる方法(局所治療)はせず、まず、体全体のバランスを調節する(本治：ほんち)ことによって、頸の筋肉のコリを緩和することを考える。頸以外の足首や腕やその他の部位のツボを複合的に使うことによって、体全体のバランスを整えると、頸の筋肉のコリも同時に消失してしまうのである。それは、鍼灸の理論的根拠である『経絡の流れ』を念頭に置き、解剖学的な筋肉の構造も視野に入れながら、最も効果的なツボの組み合わせを使い治療した上での結果である。

もし、体全体のバランスを調節する(本治：ほんち)ことによって、頸の筋肉のコリが消失しきれない場合は、ここで初めて、局所治療に重点を置くことになる。

その他、頸以外が原因のめまいの中で鍼灸の有効性が発揮されるのは、内科的な要因(急激な血圧変化等)によるめまい、大脳皮質の影響によるめまい(神経症、ヒステリー、統合失調症、うつなど)である。

その症状に応じた、体全体のバランスを調える治療をすると、まず、副交感神経が活性化されて、深くてゆっくりとした呼吸に変化し、それに伴って、心は落ち着きを取り戻していく。やがて、気分も良くなって体は軽くなり、術後は血色も良くなって、「頭がスッキリとしました。」と言われる患者さんの存在が、何よりも鍼灸の有効性を証明してくれる。

長野式鍼灸には、椎骨動脈や脳底動脈の血流の活性化を念頭に置いた処置(ツボの組み合わせによる治療)もあり、他の処置(脊柱起立筋緊張緩和処置など)との相乗効果により、特に非前庭性のめまいについての改善症例は数多くあり、長野式鍼灸のめまいに対する有効性を証明している。